

本館所蔵資料は、閲覧への提供や展覧会での展示以外に、出版物やテレビ番組等での図版利用がある。図版利用の申請が最も多いのは、森川許六が描いた松尾芭蕉の『奥の細道行脚之図』(元



禄6(1693)年画(左図)である。同図が天理図書館の所蔵品と知っている人は必ずしも多くないかもしれないが、国語や歴史の教科書や学習用教材に載っており、多くの人が一度は目にしたことがあるだろう。

なぜ教科書が同図を掲載するのだろうか。現存する芭蕉像のほとんどが芭蕉の没後に描かれたものであるのに対して、この『行脚之図』は、芭蕉生前中に描かれたものである。また、画者の許六は、芭蕉の弟子であり、蕉門十哲の一人に数えられる。とりわけ、画才については『許六離別詞』の中で「画はとって予が師とし、風雅はをしえて予が弟子となす」と芭蕉が高く評価している。元禄6年当時、芭蕉は『奥の細道』を執筆中であり、翌年に没した。

『奥の細道行脚之図』に次いで図版掲載利用の申請が多い資料の一つが、フォペルの地球儀(下図)である。意外に思うかもしれない。松尾芭蕉は、日本人であれば知らない人はいないような人物であるのに対して、フォペルを知っている人はどれほどいるだろうか。それにも関わらず、教科書にも掲載されることがある。



地球儀(直径28cm、高さ34.5cm)

カスパー・フォペル(Caspar Vopel)は、ケルン近郊の小さな町メデバッハで生まれ、ケルン大学で数学を修めた後、数学教師をしながら、地図や地球儀・天球儀等を製作し、その分野でも知られていた。本館所蔵フォペルの地球儀のインスクリプション(銘文)を転記すると、“CASPAR. VO/PELLEVS. MEDEBACH/GÆOGRAPHICAM SPHÆ/ RAM HANC FACIEBAT/ COLONIÆ A. 1536”(「/」は改行位置)とある。「メデバッハ出身のカスパー・フォペルがこの地球儀をケルンで1536年に製作した」と読める。フォペル製作のものとしては現存最古の地球儀である。

中空の紙製の球に木版で地図を印刷した12枚の舟底型紙片(ゴア)を貼り合わせたもので、真鍮製の子午環の両端に留め金で固着された軸の周りを回転する構造になっている。動物の脚の形をした三脚台のようになっており、三脚台から伸びる女性の半身像を彫刻した真鍮製の三本の支柱が幅1.9cmの地平環を支えている。

北アメリカとアジアをつながった一つの大陸として描いており、日本を現在の西インド諸島に浮かぶイスパニョーラ島に“Zipanga”と記すなど、コロンブスの頃の世界観を留めている。

この地球儀を教科書が掲載するのは、日本史におけるキリスト教伝来と南蛮貿易のくだりである。1549年にフランシスコ・ザビエルが来日して以後、キリスト教宣教師によって南蛮の品々が日本へ持ち込まれる。地球儀もその一つである。ザビエルの来日

と製作年代に近いフォペルの地球儀を舶来した品の一つとして掲載することができる。

ところで、各地の大名は貿易の利益を得るためにキリスト教を保護し、領内での活動を許可した。織田信長もその一人で、地球儀も所持していた。ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは『日本史』の中で、信長が宣教師の話に感服する様を以下のように描写している。

ある時、信長はわざわざ我らの掟の話聞き、それについて議論し、かねて抱いていた疑問を質そうとオルガンティーノ師とロレンソ修道士を多くの武将の前に呼び、外にいる者も聞けるように彼らがいた広間の戸を開けさせた。彼は以前に見たことがある地球儀を再びそこへ持ってこさせ、それについて多くの質問をし反論した。最後に、司祭と修道士が一同の前で答えたことに常に満足の意を表し、伴天連たちの知識が仏僧らのそれと大いに異なっていると述べた。(中略)終りに信長は、司祭がヨーロッパから日本に来るのに、どのような旅をしたかを地球儀によって示すことを希望した。彼はそれを見聞した後、手をたたいて感心し、驚嘆の色を見せ、かくも不安全で危険に満ちた旅をあえてするからには、彼らは偉大な勇気と強固な心の持主に相違ないと言い、司祭と修道士に向かい、笑いながら、貴公らはかくも危険を冒し、遠く長い海を渡って来たからには、その説くことは重大事に違いない、と語った。

信長が見ていた地球儀について具体的な記述はないが、地球儀が重要な役割を果たしていることがうかがえる。

以上、教科書への利用など、図版掲載の多い資料について述べてきたが、本館は地球儀の他に1544年製のフォペルの渾天儀(armillary sphere)も所蔵している(右図)。渾天儀とは、天球のモデルであると同時に天体の観測装置として使われた器械で、水平線、子午線、天の赤道、黄道、白道などを表す多数の環などで構成し、製作者や時代によってさまざまなものがある。



渾天儀(直径12.7cm、高さ19.5cm)

館蔵フォペルの渾天儀については、本館所蔵の他の古地球儀・天球儀とともに他日稿を改めて紹介できればと思う。

[註]

- (1) 令和7年度版中学校用教科書『新編新しい国語3』(東京書籍)他に掲載がある。
- (2) 松尾芭蕉の門人の内、特に優れた10人。
- (3) 令和7年度版中学校用歴史教科書『新しい日本の歴史』(育鵬社)には、『奥の細道行脚之図』とフォペルの地球儀の両方の掲載がある。
- (4) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』第5巻、中央公論社(1978年)、29~30頁。
- (5) 日本天文学会編『天文学事典』<https://astro-dic.jp/>(2026年3月3日閲覧)。

[参考文献]

- 牛見正和「奥の細道行脚之図」『陽気』、2007年10月号。
天理図書館編「地球儀・天球儀I」『善本写真集二十』(1963年、天理大学出版部)。
神崎順一「フォペル地球儀」『陽気』、2007年5月号。